地域を知ろう(33)　民話・伝説　No.13　伊藤　整

杉並時代の伊藤整

この前は、女流作家林芙美子をこの欄で取りあげ講評をいただいたので今回は男性ということで、小説家であり文芸評論家でもあった伊藤整を紹介してみたいと思います。

戦後彼の名を大きく紙上を賑わしたのがワイセツ表現で有名な「茶太令夫人の恋人」の完訳に端を発した裁判事件であります。

勿論現在の性的表現の水準から見れば、問題にならないでしょうが当時の性に対する表現常識からは問題となったのです。

前置は、このくらいにしまして、この伊藤整が杉並の住人として麻布から移ってきたのは昭和三年秋ごろで、伊藤以外にも多くの作家、文化人といわれる人が東京西部に移り住むようになったのです。この時の住所は松ノ木一一四四番地、家主は画家の上野斌郎という人で田園アパートという杉並ではアパート第一号のクラスではなかったかと思います。敷地四百坪位、部屋数三十二室という大きい部類でした。今の和田一丁目二十一番三号の処で天狗不動横を入った辺になります。

息子の礼さんの話では「和田本町の家は、今佼成会の建っている一区画で、田を埋めて区画整理をした土地に小さな箱のような二階建ての貸家が田の字に四軒建っていた」など、当時を回想しています。同十八年久我山に家を購入して移りましたが、空襲が激しくなると北海道へ疎開したのでした。

でしょう、今の松ノ木二丁目三十五の一付近にあたります。このアパート時代も同五年引き払い中野へ、この時小川貞子と結婚したのです。

再び杉並へ移り住んだのは戦争間近かな昭和十一年三月で和田本町七一四番地、木造二階建て新築の一軒を借りて入りまし